

モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



最高峰アオラル山はカーダモン山脈の東南端、2番目のサムコス山は北西端に位置する。カーダモン山脈はトンレサップ湖の南側をほぼ併行して連なる東南アジア最大の山岳原生林地帯だ。虎や熊、象が棲息している。環境省は全域を野生保護区として入域に制限を設けている。写真の象は、アオラル山山麓のもので、野生保護区が設定される以前に捕獲されたものだろう。これらの野生動物は、すでに乱獲で激減したと聞く。



親子が遊ぶ川を渡ると麓の集落は近い。

ヘッデンで照らす。ざわざわっと音がした。地面をよく見ると、蛭がうじゃやうじゃ。いっせいに逆立ち？してゆらゆら、やってる。特大のイソギンチャクみたい。サンダルにそつと足を下ろすと、数匹がピタつとくぶしに跳んでき

たが為す術なし。翌朝、足が固まってしまったスムロン、キムスロイ、それに年長のレンジャーにはそこに残ってもらおう。ガイド君と若いレンジャー君、僕の3人で頂上を目指した。しかし、僕らは標高1200mの水場にも達せられず、夕方早々とくたくたになつて同じビバークサイトに戻った。

焚き火を囲んで、ローカルの安ウイスキーをちびちび酌み交わす。今回は敗退。僕はそう宣言した。原真さんの受け売り、敗退を決めたら次の目標の準備として下山する。若いレンジャー君と話すと彼は軍人じやなかつた。登山文化の普及に情熱を持つているフランス留学を終えたばかりのエリートだった。君もうちの2人も登山のいろはから学ぶ必要がある、と僕は言った。うちの2人は遅くまでごによごによ話していた。何かズルを共謀しているのに違いな

い。案の定、街に戻ったら家族にサムコスに登つたと口裏を合わせて欲しいと懇願してきた。ガクツ。

(続く)

カンボジアの第2高峰 サムコス山1738m(2)

高度計を見ると、僕らはまだ山麓からやっと500m上がったに過ぎなかつた。チベットのカンパ族みたいになつたりとした体格のガイド君も、荷物を降ろしてへたり込んだ。ルートが分からない、と泣き言を垂れる。そこで始めに聞くべきだった質問をした。前に登つたのはいつ? 10年ぐらいい前。おい(汗)

無数に刺さる棘と、潰れた蛭のお陰で僕の体は血だらけだ。湿気飽和状態のタフなジャングルで、僕らはみんな、汗と血にまみれ、くしゃくしゃになつていた。日は傾いたのに、僕らはまだサムコスの足元でうろうろしていた。夜行性の猛獣とバツタリはカンベンなので、1時間前に通り越した貧相な沢に戻つてビバークすることにした。樹木にハンモックを吊る。湿った小枝に苦勞して火をつけ、米を炊き鶏肉を焼いて食べた。食事

目指せ、 アンコールクライマー誕生!!

がすむとハンモックに入りこむ。疲れていたのですぐに眠ってしまったが、夜中に物凄い地響きで飛び起きた。年長のレンジャーが、象の行進だといつた。マジかよ。この狭い沢筋が連中の散歩コースになるだけで僕らは、のしいかになる。虎か熊だけかと思つたら象もいたんだ。

びびつて眠れなくなつてしまつた。小雨が降っているのにハンモックから見上げると星が見えた。と、思つたら違つた。蛭。恐ろしさと美しさがごちゃ混ぜのシユールな空間が僕らを包んでいた。トイレに行こうとハンモックから顔を出して足場を

ヘッデンで照らす。ざわざわっと音がした。地面をよく見ると、蛭がうじゃやうじゃ。いっせいに逆立ち？してゆらゆら、やってる。特大のイソギンチャクみたい。サンダルにそつと足を下ろすと、数匹がピタつとくぶしに跳んでき

たが為す術なし。翌朝、足が固まってしまったスムロン、キムスロイ、それに年長のレンジャーにはそこに残ってもらおう。ガイド君と若いレンジャー君、僕の3人で頂上を目指した。しかし、僕らは標高1200mの水場にも達せられず、夕方早々とくたくたになつて同じビバークサイトに戻った。

焚き火を囲んで、ローカルの安ウイスキーをちびちび酌み交わす。今回は敗退。僕はそう宣言した。原真さんの受け売り、敗退を決めたら次の目標の準備として下山する。若いレンジャー君と話すと彼は軍人じやなかつた。登山文化の普及に情熱を持つているフランス留学を終えたばかりのエリートだった。君もうちの2人も登山のいろはから学ぶ必要がある、と僕は言った。うちの2人は遅くまでごによごによ話していた。何かズルを共謀しているのに違いな